

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

60年9月現在 会員数
逗子地区 174名
葉山地区 292名
大船地区 54名
(合計) (520名)

60年9月号 (158号)
発行者 岸 岳 萃
編者 根 村 集 岳
中 村 愛 岳

夏期吟道講座に参加して

堀内支部C 高梨 良風

長梅雨の後に連日酷暑の八月三日、四日夏期吟道講座に参加致しました。昨年来の念願で中村幸岳先生が参加なさるといふ事で一緒に申込んでいたとき、当日は葉山の朝の交通渋滞を考え、七時前に家を出、中村先生、千葉先生、村田先生達と御一緒させて頂いたとききました。

会場の九段会館の中に入ると人、人、人で座席を求めるのに苦労の一幕でした。会場内は冷房がきいて大助かり。ベルと共に開講式、当日の出席者九一九名でこれ程多くの方々が北から南から出席され、その熱心さに驚きました。そして昭和十三年三月に発会以来、来年三月で満五十年と聞き、歴史の古く、堅い事に感銘を覚えました。次に松井先生の講話に入り、先生の今日迄の歴史を話されました。精進する為に海に向って練習を重ねた事、御長男が幼くして吟をされた事、吟の為に東北に御旅行等々、でもこんなお話の中で先生にも落込まれた時があったとか：人間本能的にこうした事も有るものかと思いました。そのあと大野孤山先生との出会い、韻読の事等色々

教えていただきました。最後に文天祥の「正気の歌」と藤田東湖の「文天祥正気の歌に和す」の長詩を韻読を交えて朗詠して下さいました。終始姿勢を正して朗々と吟じられましたのは今更乍ら頭の下る思いでした。後で聞いた話ですが、壇上は冷房がきかずとても暑いとか。

第一日は安孫子岳晴先生の「八幡公」「京に入る使に逢う」、菅野岳蓉先生の「晚秋舟行」三夕の歌「さびしさは」、増田岳功先生の「初冬の作劉景文に贈る」和歌「同じころ」、佐藤岳養先生の「関山月」和歌「海」で終わりました。各先生の立派な吟と、二句三息の息つき、作者の心を思いながら吟ずる事等お話し下さいました。

第二日目の四日は混雑にこりて昨日より一電車早く出、上村先生も御一緒でした。講義はまず佐藤岳蘭先生の「生田に宿す」短歌「白鳥は」で今迄と違う朗詠で新しい勉強をさせていただきました。前詠は簡単に、後詠は作者の気持、詩の意味等に気を付ける様にとの事でした。次に東京芸大名誉教授日本音声学会理事・酒井弘先生の「発声の基礎」の講義に入り、発声法の実技等教えていただきました。ついで今村岳仁先生の「児島高德桜樹に書するの函に題す」「塞下の曲」で終わりました。最後に研

究発表で各地から出席なさった方の中から十七人の方が吟じてお二人の先生から色々御指導を受け、聞いている私達も成程と勉強になりました。

講座は無事終り葉山に着くと西の空には茜雲がたなびき明日も暑そう。井の中の蛙が大海を見ることができて嬉しい限りでした。元気でいたなら来年も是非出席したいと思ひ、手にしたテープを参考に今後も精進してゆきたいと思ひます。

寒河江吟友会と

姉妹会締結

60年9月1日付を以て碩心会と寒河江吟友会が姉妹会となりました。これを機に両会の友好と益々の発展につとめましょう。

神奈川県本部吟行会

第88回全国吟道大会

とき 60年10月9日(水)10日(祭)11日(金)
ところ 神戸文化会館

(碩心会参加者名)

加藤岳相 沼田洗岳 中村幸岳 千葉劔岳
千葉香岳 中村愛岳 森田暁岳 松野春岳
森田嶺岳 綾部秋岳 村田滯岳 渡辺秀風

白井寿風 白井麗風 佐竹梢風 石渡啓風
田辺伯風 安田寿風 平山栄風 重松由風
小形雄風 行谷佳風 田中明風 松井正風
大屋正山 行谷松山 鈴木羊山 金子輝泉
角田照泉 長島正泉 (以上30名)

今年は楠公六百五十年祭：県本部吟行会ではゆかりの湊川神社他を訪ねます。参考迄に略年譜を書いてみます。

◇永仁二年(一一九四) 正成千早赤坂村に生る。

◇文保二年(一一二八) 後醍醐天皇即位。

◇元弘元年(一一三二) 天皇、笠置山に倒幕の挙兵。正成赤坂城に挙兵。天皇捕われ、光厳天皇に讓位。赤坂落城。

◇元弘二年(一一三三) 後醍醐天皇、隠岐に流さる。護良親王、吉野で挙兵。正成、千早城に応ず。

◇元弘三年(一一三三) 天皇、隠岐脱出。足利尊氏、新田義貞らと挙兵し鎌倉陥ち北条氏滅亡。光厳天皇を廢し、建武の新政を始む。

◇建武三年(一一三三) 足利尊氏、京都に於て新田義貞、楠木正成らと戦ひ、敗れて九州に逃れる。九州に敗走した尊氏は再び東上、湊川の戦いで正成戦死。後醍醐天皇、吉野に移り、南北朝対立。

◇正平三年(一一四八) 正成の子楠木正行、四条暖の戦いで死す。

審査課題 (六十一年より実施)

伝段位	初段	二段	初伝	三段	四段	中伝	五段
課題	漢詩 七言絶句	(自由) 課題	漢詩 七言絶句	漢詩 七言絶句	漢詩 五言絶句	漢詩 五言古語 和歌	和歌 七言律詩
吟題	秋日友人に別る 九月十日 海南行 客中	道灌叢を借るの図に題す 九月十三夜 不識庵機山を撃つの図に題す 爾壘山	常盤孤を抱くの図 漫述 金州城下の作	勤学 易水の送別 天草洋に泊す	述懐(癸丑の感偶作) 敷島の(山さくら) 幾山河(中国を巡りて)	本能寺 獄中感有り ひながしの(東の野) 箱根路を(伊豆の海)	
頁	15 16 17 18	21	20 29 54	32 52 53	57 108 109	66 68 80	72 74 12 44

師範		準師範		奥伝		六段	
書取り	朗新 俳句 俳句 和歌 和歌 七言律詩	漢詩	和歌 七言律詩	書取り 朗新 俳句 俳句 和歌 和歌 七言律詩	漢詩	和歌 漢詩	漢詩
月照十七回忌	千曲川旅情の歌 (1・2・3)	登楼 しろがねも (子等を思ふ歌の反歌) みわたせば (三夕の歌) やれ打つな とんぼつり 小諸なる古城のほとり (1・2・3)	黄鶴楼 零丁洋を過ぐ 田兒の浦ゆ (富士の山を望める歌の反歌) 真木ふかき (山水)	八幡公 瘦蛙 小諸なる古城のほとり (1・2)	前兵児の謡	君が世を(わが身ありとは) ふるさとの山に向いて (ふるさとの山)	春望 山中の月
1 43	旧4 107	旧3 152	朗 18	朗 150	朗 70	朗 62	朗 2 99
皆伝		八段		七段			
書取り	朗新 俳句 俳句 短歌 和歌 漢詩	書取り	朗新 俳句 俳句 和歌 和歌 七言律詩	書取り	朗新 俳句 俳句 和歌 和歌 漢詩	漢詩	漢詩
獄中感有り	富士の山を詠める 小諸なる古城のほとり (2・3)	本能寺 母を送る路上の短歌 (韻読入) 獄中作 身はたとひ(武蔵の野辺) みづうみの(諏訪湖畔) 夏草や(奥州高館にて) 塚も動け	菜の花や(春景) 小諸なる古城のほとり (2・3)	無欲 香炉峰(香炉峰下新に山居を の雪(トし草堂初めて成る。 かきわけて(なでしこ) 月よみの(山路)	奥の細道(俳句を除く) 自然と人生(一節)	筑前城下の作 門を出でず 東風ふかは にはの面は (夏月をよめる)	
1 74	旧4 106	朗 104	朗 106	朗 95	朗 62	朗 26	朗 2 3 4 5 8
正師範		十段		九段			
書取り	朗新 俳句 俳句 短歌 短歌 漢詩	書取り	朗新 俳句 俳句 短歌 和歌 漢詩	書取り	朗新 俳句 俳句 和歌 短歌 漢詩	漢詩	漢詩
書懐	富士の山を詠める 小諸なる古城のほとり (1・2・3)	坂下の歌 山中問答 小楠公 今日もまた(心の鐘) 春ここに(春) 柿くえば なが霖や 富士の山を詠める	銀河(3・4) 雨ニモ負ケズ 前兵児の謡 とんぼつり やれ打つな	親思う(安政六年十月) 白鳥は とんぼつり やれ打つな	秋々吟 吉次峠の戦 親思う(廿日書簡) 千曲川旅情の歌 零丁洋を過ぐ	待興の歌(韻読入り) 偶成 やわらかに 天の原(唐土にて月を 見て詠みける) 我と来て これがまあ(雪五尺) 銀河(1・2)	
1 76	旧4 106	朗 110	朗 109	朗 58	朗 112	朗 22	朗 2 4 7 8

練吟メモ

- 1 去年今夜待清涼
- 2 去年今夜待清涼
- 3 去年今夜待清涼
- 4 去年今夜待清涼
- 5 去年の今夜清涼に待す

漢詩の書き方は、教本や「吟道」では、右の五例です。これに句読点(○と、)をつけると、句例はさらに倍になります。

○1は白文といひ、木村岳風先生作の漢詩は皆これです。日本漢詩でわれわれの目に触れるのは、句ごとに並べた、整った詩形ですが、本場中国では、絶句でも、律でも一字の空きもなく、縦に続けて書きます。日本でも、例えば頼山陽の書や板本(教本一ノ67、69参照)は、中国方式でした。

○旧教本の二、三巻の漢詩は、2の例で載せています。「読方」が併記してあるので支障はないものの、初心者には不便であったと推察されます。さて、漢字左下の二の記号(そのほか、レ点、上・中・下点 甲・乙・丙点など)は「返り点」といひ、われらが先祖たちは、賢明にもこの方法を考案して、漢詩文を日本風に読みこなして来たのです。

○3例で、漢字右下のノ、ス、ニは「送り仮名」といひ、むかしから片仮名で書くことになっていきます。この片仮名も返り点同様、漢詩文を日本風に読みこなすため創案した記号です。ですから、返り点も送り仮名も、漢詩文を扱う上での大事なきまりです。因みに、前述の「句読点」と「返り点」「送り仮名」の記号を総称して「訓点」といひます。漢詩文勉強の第一歩です。

○4の「去年……」の句例は、「吟道」に時々見られます。漢字の読みは、もともと平仮名であり、送り仮名は片仮名とすることに変わりはありません。片仮名とひら仮名が混りますが、これも、漢詩文を扱ううえでのみまると、心得ていただきたい。

○漢詩文の形をくずさないで、日本の文語法に従って漢詩文を読むことを「訓読」といひます。そして、訓読どおり書いた漢文が5例の「書きくだし文」です。吟詠教本では、訓点のほかに吟符が加わるので、読み易いように書きくだし文に統一しているようです。でも、詩文の解明力(準師範以上附与基準)習得の見地からすれば、いつも3例あたりの漢詩形に接していた方がいいと思うが、どうかしら。

ぎんなん

旧教本に載っている漢詩で、一番年代の古いのは「凱風」です。これは、中国最古の詩歌集である「詩経」の中に収められています。ちなみに詩経は、紀元前十一世紀から前八世紀(十二〜七世紀の説もあり)に至る、およそ三、四百年間の黄河流域の民謡を主に、孔子(前五五〜前四七九)により編集されたものゝようである。

新教本で中国詩の最も古いのは、第二巻に「垓下の歌」(項羽)と「大風の歌」(高祖)が載せてある。いずれも紀元前二百年ごろの作品です。日本漢詩では「秋日友人に別る」(巨勢謙人)が一番古く八二〇年ごろの作。従って、この詩にくらべると「凱風」はおろむね千七、八百年も古く、「垓下」「大風」は千年も古いということ。本当に驚きというほかはありません。

(退会)

- 296 吉川千山(逗子A)
- 417 萩原康大(唐木山)
- 422 金子由松(唐木山)
- 592 長瀬ハナ(上原)
- 616 神河イソ(下山口)
- 626 坂入正(吟甫)